

# 「旭卉」の解釈について

——「上天之緯、杳旭卉兮」——

松浦史子

## 【おおよその解釈】

①亂日、②崇崇圜丘、隆隱天兮。③登降別施、單墀垣兮。④増宮峻差、駢嵯峨兮。⑤嶺嶠嶙峋、洞亡厓兮。⑥上天之緯、杳旭卉兮。⑦聖皇穆穆、信厥對兮。⑧依祇郊禋、神所依兮。⑨徘徊招搖、靈遲迨兮。⑩輝光眩燿、隆厥福兮。⑪子孫孫、長亡極兮。①亂に曰く、②崇崇たる圜丘は、隆くして天を隱す。③別施を登降し、單として墀垣たり。④増宮峻差として、駢りて嵯峨たり。⑤嶺嶠嶙峋として、洞かにして厓り亡し。⑥上天の緯、杳かにして旭卉たり。⑦聖皇は穆穆として、信に厥れ對へり。⑧郊禋に依り祇みて、神の依る所なり、⑨徘徊し招搖して、靈は遲迨す。⑩光を輝し眩燿して、厥の福を降す。⑪子孫孫、長へに極り亡し。

①亂にいう、②高々と聳える祭壇は、天空を隠さんばかり。③うねる道を上り下れば、祭壇は大きくまるい。④幾重にも層を成す宮殿は高く低く、並び聳え、⑤深く遠く、どこまでも果てが無い。⑥上天の事は、深遠で、人知を超えた神秘的な動きをする。⑦天子は威儀を正して嚴肅に、まこと天に配された地上の統治者にふさわしい。⑧謹んで天を郊外に祀れば、神はここに依りたもう。⑨神靈は徘徊してはたたずみ、遊び憩い、⑩眩く光り輝きつつ福を降す。⑪天子の子々孫々、とこしえに絶える事無く栄えん。

このうち、「上天之緯、杳旭卉兮」について検討する。

## 【校勘】

なし

## 【旧注・旧説の整理】

- (1) 顔師古注：「緯、事也。杳、高遠也。旭卉、疾速也。」（「緯」は、事。「杳」は、遠く隔たっていること。「旭卉」は、速いことである。）
- (2) 李善注：「旭卉、幽昧之貌。『毛詩』曰、上天之載、無聲無臭。」（「旭卉」は、幽昧であるさま。『毛詩』「大雅・文王」には「上天のことは、聴こうとしても声もなく、嗅ごうとしても臭いもない。」とある。）
- (3) 六臣注本：「善曰、旭卉、難知也。」（李善は、「旭卉」は知りがたいことであると云う。）
- (4) 張銑注：「旭、美。卉、衆也。言上天之事高遠、故其美衆多也。」（「旭」は、美しいこと。「卉」は、多いこと。上天の事は高く遠く、故に其の美しが多いことを言う。）
- (5) 王先謙注：「善注、旭卉、幽昧之貌。六臣本、旭卉、難知也。卉、疑晦之借字、與顔説異。」（李善注には、「旭卉」は、幽昧のさま」とあり、六臣本の李善注には、「旭卉は、知り難きこと」とある。「卉」は「晦」の借字ではないかと思われる。顔師古の説とは異なる。）
- (6) 【揚雄集校注】：「旭、明。卉、借爲晦。旭卉、意爲天道若明若暗、故李善曰：『幽昧之貌』與詩『無聲無臭』意合。顔師古曰：『旭卉、疾速也。』不知何據。」（「旭」は、明るいこと。「卉」は、「晦」の借字として用いている。「旭卉」の意味は、天道が明るような暗いような、つまり分かるような分からないような状態であること。故に李善は「幽昧の様子」であり、『詩経』「大雅・文王」の「聲も無く臭いも無い」の意と合うというのである。顔師古が「旭卉は、速い事である」というのは、何に依つたのか判らない。）

(7) Knechtges 訳…「The actions of high Heaven, / Are mysteriously swift and sudden. (天の行いは、神秘的な<sup>1</sup>素早く突然に為<sup>2</sup>なれぬ)」(注釈) …Hu Shaoying (8.11a) proposes to equate *hui* with *xu* 歛 (\**hyuel*), “sudden”. Zhu Qifeng (see *Ci Tong*, p. 2389) equates the binome with *shuhu* 倏忽 (\**hyuk-huel*), “sudden”, and its variants. The basic senses of the line is that the actions of Heaven are so fleeting, they are mysterious and hard to understand. (…胡紹煥『昭明文選箋證』8.11a) は、「hui 卉」と「xu 歛—突然」を同義と解することを提案している。朱起鳳『辭通』p.2389) は、「この双声語と「shuhu 倏忽—突然」及びその類似語とを同義と解する。この一文の基本的な意味は、天の行いは束の間<sup>3</sup>に為<sup>2</sup>されるので、神秘的で理解しがたい、という事である。】

### 【問題提起】

一篇の総括である「乱」の部分である。内容としては、A 甘泉宮とそこに設けられた祭壇の荘嚴な様子を描く②〜⑤、B 皇帝による祭祀の様子を描く⑥〜⑧、C 神靈が福を降し、漢王朝の永続を言祝ぐ⑨〜⑪、の三部分に大別される。このうち本報告で取り上げる「上天之緯、杳旭卉兮」は、B の祭祀の描写の冒頭、上天について述べる語として用いられている。

「旭卉」という双声の語の解釈については、Knechtges 注にも指摘される様に、注釈者達の見解は一致していないが<sup>1</sup>、概ね、李善の「幽昧であるさま」、「顔師古の「速いさま」の二説に大別される。〔漢語大詞典〕でも、「旭卉 *xuhui*」の説明に「甘泉賦」を引き、「この二つの説を記述している」。

これに対し Knechtges 氏は、「天の行いがとても速いので、それらは神秘的で解しがたい」と、二説の折衷案を示す。氏が注に引く胡紹煥『昭明文選箋證』は、①司馬相如「上林賦」の郭璞注、②『漢書』顔師古注、③『說文』の記述を併せて、「卉」＝「𦵏」、「𦵏」の意味は「勃」「歛」「疾」であるとし、さらに、江淹「雜體詩・王微君・養疾」(『文選』

卷三十一)の一句、「歎吸鷓鷯悲」に対する李善注「歎吸、疾貌」を引き、「旭卉 xūhuì」と「歎吸 xūxī」は音が近いので、顔師古の「旭卉、疾速」説を正しいとする。また、王延壽「魯靈光殿賦」の「歎歎 xēixū」の李善注が「幽邃之貌」とする例を挙げ、「歎歎 xēixū」と「旭卉 xūhuì」が、音義共に近い双声語である事を指摘し、「幽味」説をも「義において通ず」とする。同じく Knechtges 氏が注に引く朱起鳳「辭通」(卷二十二)では、「倏忽」の項目に、「倏忽」「翁忽」などと共に「旭卉」を挙げて、「甘泉賦」顔師古の「速疾也。」を引く。また、案語に「卉」と「忽」は双声語であると言う。

『四庫全書』(電子版)を検索してみると、揚雄以前に「旭卉」の使用例は見あたらない。これが音を重視する「賦」というジャンル作品であることを考えると、同類の音を持つ語を手がかりに「旭卉」の意味を検討するのは最も有効な方法であると思われる。よって本報告では、揚雄と同時代およびそれ以前の「旭卉」と同類の音を持つ語の用例を検討し、「旭卉」の意味を考察する。考察に当たっては、朱起鳳「辭通」の挙げる用例を参照した。

### 【用例・考察】

「旭卉」を理解する一助として、まず、揚雄がこの賦を上奏した時代の郊祀制度、および揚雄の思想について触れておきたい。

漢代の郊祀制度について検討した金子修一氏の論究によれば、前漢の元帝・成帝期から儒教の経書の記述に即した郊祀・宗廟の制度が取り入れられたが、それ以前の皇帝祭祀は不老不死を祈求するような個人的な性格が強く、また、甘泉の泰一壇の成立には、前漢の皇帝祭祀の中でも方術的な色彩が最も強く認められるという。<sup>3)</sup>氏はまた天と皇帝の関係の変化についても言及し、王莽の時にになると儒教的な「孝道」の觀念に基づいた「天と皇帝との父子関係」が強調され、天と皇帝との位置関係も改めて定められた、と述べている。揚雄の「甘泉賦」は、この様に、郊祀制度に於いて天

への従属的觀念が重視されつつあった、成帝の時代・元延二年（前十一）に上奏された作品である。

揚雄の思想については、儒教・道教双方からの影響が指摘されている。例えば、堀池信夫氏に拠れば、揚雄の『太玄経』は、漢代道家の書である『淮南子』を継承するにも拘わらず、揚雄の思想的立場はあくまでも儒家的なものであり、氏は、それを「道家思想を受容した儒家思想」という。<sup>(4)</sup>

ではまず、『淮南子』から、「旭卉」と同類の音を持つ「倏忽」の語の用例を見てみたい。

〔用例①〕 倏忽 (shūhūi・倏) 〔広韻〕式竹切／「忽」〔広韻〕呼骨切)

①—1、【精神】；『淮南子』「脩務訓」に、「且夫精神、滑淖纖微、倏忽變化、與物推移、雲蒸風行在所設施。（且つ夫れ精神は、滑淖纖微、倏忽に變化し、物と推移し、雲蒸風行して設施する所に在り。）」とある。その意味は、「精神とは柔軟で繊微なもの、忽然と變化して物と共に推移し、雲の湧き風の行くが如く、どの様な事態にも対応する事ができる。」ということになる。

この例に見える「倏忽shūhūi」の語の主格は「精神」であり、「精神が瞬く間に變化を遂げるようす」を表現している。ちなみに、『漢語大詞典』の「倏忽」の項目には、『淮南子』のこの例を採って「指极短的时间（非常に短い時間を指す）」と言う。

〔用例②〕 儻忽 (shūhūi・儻) 〔広韻〕式竹切／「忽」〔広韻〕呼骨切)

【蛇と雷電】；朱起鳳は「倏忽」の項に、「儻忽」の用例を多く挙げているが、この語をとりわけ多く用いるのは『楚辞』である。

②—1、『楚辞』「招魂」の南方の地を述べる箇所に、「雄虺九首、往來儻忽、吞人以益其心些（雄虺の九首なる、往來

儻忽として、人を吞んで以て其心を益す」とあり、王逸注には、「儻忽、疾急貌也。言復有雄虺、一身九頭、往來奄忽、常喜吞人魂魄、以益其心、賊害之甚也。」(儻忽)は疾いさま。また九つの頭を持つおろちがいて、すばやく往き来しては、常に喜んで人の魂魄を呑みこみ、その心に精を付けており、その被害は甚だしいことを言う。」とある。<sup>(5)</sup>

②—2、『楚辞』「天問」に、「雄虺九首、儻忽、焉在(雄虺の九首なる、儻忽として焉にか在る)」とあり、王逸注には、「虺、蛇别名也。儻忽、電光也。言有雄虺一身九頭、速及電光、皆何所在乎。(虺は蛇の別称。儻忽は電光である。猛々しいおろちが居て、一つの身体に九つの首、その速さは電光のよう、(直前に描かれた虺龍と合わせ)それらは皆どこに居るのか?)」とある。また、洪興祖注には、「儻忽、疾急貌。(儻忽)は疾いさま。」とある。

後漢の王逸は、「招魂」の九頭の蛇の様子「儻忽」に対して「速い」、「天問」では「電光」と注解する。つまり、王逸にとつて、「九頭の蛇が「儻忽」として動く様」には、「雷電」のイメージが重ねられているのである。王逸が「蛇の速さ」の表現として「雷電」を選んだのはなぜだろうか。蛇の動きの「速さ」のみを表現したのであれば、例えば猛禽類の俊敏な動きなどに譬える方法もあるはずで、必ずしも「雷電」である必要はないだろう。思うに、王逸が「蛇」の動きに「雷電」を選んだ理由は、上天から大地へと「蛇のごとく」身をくねらせて降るダイナミックな「雷電」の視覚的イメージにあるのではないか。

「甘泉賦」の中で、揚雄は「儻忽」の語を、「雷電」そのものの描写に用いている。

②—3、揚雄「甘泉賦」に、「雷鬱律於巖突兮、電儻忽於牆藩(雷、巖突に鬱律として、電、牆藩に儻忽たり)」「漢書」では初めの句が「雷鬱律而巖突兮」であるが、意味がとりにくいため、『文選』の句を用いた。」とあり、李善注には、「儻忽、疾貌也。(儻忽)は速いさま」とある。この句は、甘泉宮の壮大なあり様を述べる部分にあり、「雷ははるか下方の山あいでも小さく鳴り、稲妻はまがきの辺りにさっと閃く。」という意味になる。

「雷電」のうち、「雷」は主として聴覚的要素を、「電」は視覚的要素を表わし、いわゆる「稲妻」の現象は「電」の

方である。②―2の『楚辞』「天問」の例でも推測したように、「儻忽」という語の核心には、蛇の如く身をうねらせつつ瞬時に天地の間を繋ぐ光りの筋―稲妻―のイメージが存在するのではないだろうか。

【神】…さらに、「儻忽」という語は「神」の往来する様にも用いられる。

②―4、『楚辞』「九歌・少司命」に、「荷衣兮蕙帶、儻而來兮忽、而逝（荷の衣に蕙の帶、儻として来り忽として逝く）」とあり、王逸は、「言司命被服香淨、往來奄忽、難當值也。（司命は薰り高く清らかな衣服を纏い、往来すること素早く、めぐりあうことが難しい事を言う。）」と注解する。

これによればこの例は、「司命の君は、蓮の衣を召され、蕙の帯を締めている。たちまちの内に来たり、また忽ちの内去过つていく。」という意味になる。

②―5、『楚辞』「遠遊」に、「神儻忽而不反兮、形枯槁而獨留（神、儻忽として反らず、形は槁して独り留まる）」とあり、王逸注は、「魂靈遠逝、遊四維也。（魂は遠く逝き、四維〔世界の四方の隅〕に遊ぶ。）」という。

これによれば、この部分は、「（哀しみのあまり）、わが魂はたちまちの内に去つて返らず、あとには枯れ果てた肉体だけが残っている。」という意味になる。これは「儻忽」の語が「疾速」以外の要素をもつ事を示す例ではないだろうか。ここでは「神」（精神）が去る様子に「儻忽」の語が用いられ、王逸はそれを「速いさま」ではなく、「遠く（世界の隅々）まで遊び逝く」と注解しているのである。

以上に挙げたように、『楚辞』に見える「儻忽」の語は、九つの頭を持つ蛇や、神の往来、形骸を捨てて去る魂魄の飛翔などに用いられ、その動きが想像を絶して迅速であるのみならず、その舞台には「四維」の如き巨大な空間が想定されていた。人知を超えた神秘的な事象に用いられるダイナミックな語彙であったと考えられる。

## 【結語】

『文心雕龍』「事類」篇に拠れば、辭賦に修辭以上の學問的内容を盛り込んだのは、揚雄・班固に始まるという。また、同篇に「及揚雄百官箴、頗酌詩・書……」とあるように、揚雄が頻繁に典拠とした書物には『詩經』があつた事からすれば、「甘泉賦」の「上天之緯、杳旭弁兮」の解釈に際して、『詩經』の字句を挙げる李善の説には道理を認めねばならぬであろう。しかしながら、『詩經』「大雅・文王」の「無声無臭」という句に対応させて、「旭弁」の語をただちに「幽味のさま」或いは「知りがないさま（六臣注）」とする解釈が正鵠を得ているかと言へば、そうは思えない。

一般に漢賦は『楚辭』の影響を強く受けていると言われる。例えば、中島千秋氏は、漢初、呉王・濞の元にあつた賦家たち——枚乘・鄒陽・嚴忌などの作品はみな『楚辭』の影響を受けている事、また、同時期の陸賈・朱建らの賦なども、その句型は判然としないがやはり『楚辭』の系譜にあつた事を指摘している。さらに、前漢末の揚雄の賦に至つては、その句型に於いても「兮」を用いる『楚辭』の影響を色濃く受けている、と言う。確かに、『漢書』「揚雄伝」に拠れば、揚雄は郷里にあつた頃、「反離騷」や「広騷」「畔牢愁」など、『楚辭』に倣つた一連の文学作品を手がけおり、『楚辭』にはとりわけ造詣が深いことが知られている。とすれば、『楚辭』に見える「儵忽」の語のイメージは、揚雄が「甘泉賦」の総括において、「上天」を讚えるに際し、強く意識するところだつたのではないか。

「旭弁」の基底には、類音語である「倏忽」「儵忽」があつたと考えるべきだろう。とすれば、Knechtges氏の如く折衷説を採用するのが良いという事になるが、K氏の場合は「天の動きは速い the actions of Heaven are so fleeing」ゆえに「神秘的で解しがたい they are mysterious and hard to understand」、という因果関係である。しかし、本報告で見てきたように、「旭弁」と同類の音を持つ語は、むしろ、「人知を越えた神秘的な事象」なるがゆえに「廣大無辺の空間を背景に行われ、とらえどころが無く、且つ速い」という逆の因果関係なのである。

以上の点から、「上天之緯、杳旭弁兮」の「旭弁」は、「速い」こと、その舞台として広大な空間が想定されている



事を踏まえた上で、「人知を越えた神秘的な動きをする」と解釈したい。結果的には、「幽昧であるさま」とする李善説に近づくが、解釈の根拠は異なるのである。<sup>(9)</sup>

- (1) Commentators do not agree on the meaning of the alliterative binome *xuhui* 旭卉.
- (2) 胡紹煥『昭明文選箋證』「杏旭卉兮」按注(李)善曰「旭卉、幽昧之貌。」「卉」即「幽」字、本書(司馬相如)上林賦「於斯之時、天下大説、鄉風而聽、隨流而化、崑然興道而遷義」(李)善引郭璞注「崑、猶勃也、許貴切。顔(師古)『漢書』注「崑然、猶欬然也。』」説文「一、附、疾也。作攀爲正字、今省作崑亦作卉。江文通『雜體詩』「欬吸昆雞怒」(李善)注「欬吸、疾貌。」「旭卉」與「欬吸」音近。『漢書』顔注「旭卉、疾速」是也。此云「幽昧之貌」於義亦通。(王延壽)「魯靈光殿賦」「歇歇幽藹、(雲覆霏動、洞杳冥兮)」(李善)注「幽藹之貌」、「旭卉」與「歇歇」音義亦近、並雙聲字。(※、句説点丸「一」、および括弧○内補足、松浦加筆。)
 

なお、胡紹煥は、江淹「雜體詩・王微君・養疾」(『文選』卷三十一)の一句を引いて「欬吸昆雞怒」とするが、原文には「欬吸鷓鴣悲」とある。
- (3) 金子氏は、元鼎五年(前一一二)に武帝が甘泉太一壇を設立した背景として、①元鼎四年、この年に汾陰から宝鼎が掘り出されるという吉祥があったこと、②その冬の十一月辛巳朔旦が冬至にあたるのは黄帝の昇天の時と一致すると主張した、斉人公孫卿による一連の神仙呪術的な言動があったこと、の二点を特に重視している。なお、②の際に示された黄帝昇天の様子を記した札書は、公孫卿が斉人申公から受けたものであり、その申公は神仙方士安期生に通じていたという。この様に、金子氏は甘泉泰畤は方士達の強い影響の元に成立したと見なしている。(金子修一『古代中国と皇帝祭祀』第三章「漢代の郊祀と宗廟と明堂及び封禪」一〇三頁、汲古書院二〇〇一)
- (4) 堀池信夫『漢魏思想史研究』第一章、前漢期の思想、六、前漢宗教思想の展開、(三)揚雄の賦について(明治書院一九八八)
- (5) 『楚辭章句』『楚辭補註』王逸注は「常喜吞人魂魄、以益其心、賊害之甚也。」と作る。この部分を『文選』引『楚辭』「招魂」王逸注では、「常喜吞人魂魄、以益其賊害之心也」に作る。

- (6) 『文心雕龍』「事類」「夫經典沈深、載籍浩漭、實群言之奧區、而才思神臯也。揚班以下、莫不取資、任力耕耨、縱意漁獵。(儒教の教典は深淵を極め、群なす古典は果てしなく広い世界をくり広げて、さながら文章表現の宝庫、思考発送の神域をなしている。揚雄・班固以來、古典の世界によりどころを求めない作家はなく、めいめい力一杯に歛を古い、心のままに獲物を探し求める。)(興膳宏氏訳注『陶淵明・文心雕龍』を参照した。筑摩書房一九六八)
- (7) 中島千秋『賦の成立と展開』(関洋紙店印刷所一九六三、三〇八頁参照)
- (8) 『漢書』卷八十七上「揚雄伝」「又怪屈原文過相如、至不容、作離騷、自投江而死、悲其文、讀之未嘗不流涕也。以為君子得時則大行、不得時則龍蛇、遇不遇命也、何必湛身哉！乃作書、往往摭離騷文而反之、自嶧山投諸江流以弔屈原、名曰反離騷；又旁離騷作重一篇、名曰廣騷；又旁惜誦以下至懷沙一卷、名曰畔牢愁。」
- (9) 堀池信夫氏に拠れば、揚雄は当時の最も先端的な宇宙論である渾天論の支持者であり、その天文知識は揚雄の代表的書物である『太玄経』の冒頭(「玄首」)にも反映されているという。「甘泉賦」の「儻忽」や「旭卉」もその宇宙で行われる動きと見なすべきであろう(前掲堀池論文、同書、一八二頁参照)